

馬は真実のあなたを見抜いている

馬に教わるリーダーシップ

第8話 「ゴール直前の挫折」の真相

2014年12月18日（木） 小日向 素子

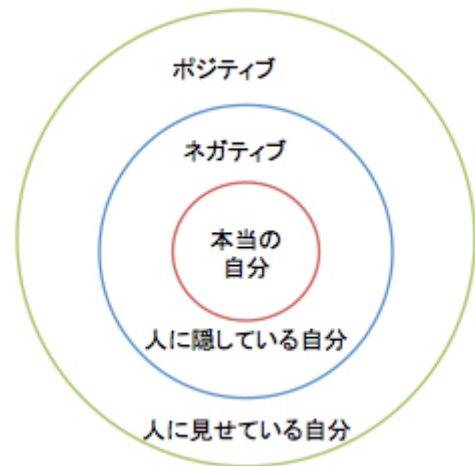
馬は「オーセンティシティー・メーター（真実発見器）」だとリンダは言っていた。

ハミルトン博士やジャンは、「馬はあなたが何を考えたか、何を話したかなんて気にしていない。あなたの発している直感的なものに反応する」と表現していた。

この件について、ジュリアの表現では下の図のようになる。

馬は、この図の「本当の自分」だけを見るという。これはよく分かる。通常の企業研修などでもよく使う図だ。

とすると、ジュリアの牧場で経験した、モヤモヤ最高潮の「馬たちがゴール直前で立ち止まってしまう事件」（もはや私の中では“事件”です）は、私のどういう「真実（本当の自分）」を表しているのだろうか？（詳しくは第4話参照）



そもそも、馬って本当に真実を見抜くのだろうか？

ホース・アシステッド・ラーニングを1990年から行っているアリアナ・ストロッチという方の著作に、馬が人の真実を見抜いたたくさんの事例が載っていた。

例えば、こんな事例があった。

サンディはキリスト教会の牧師。とても穏やかで、冷静で、自然に自信に満ちた振る舞いをする事ができる。馬に出会ったのはつい最近。実は、今の仕事に疲れきってしまっていて、何かを発見したくて、馬のプログラムに参加した。

このプログラムは、自分の望みを宣言して（あるいは念じて）、それに対してパートナーの馬たちがどのように振る舞うのか観察し、その意味を探るというもの。グループセッションなので、一人が馬とワークをする間、ほかの人たちがそれを観察して、ファシリテーターと共にフィードバックの手伝いもする。

サンディのパートナーの馬はリリー。6歳のアメリカンクォーターホースの雌。

サンディは、緊張を押し隠すように、深いため息をついてリリーに話しかける。彼女が今やるべき、新しい教会建設のこと。その教会は今よりもずっと大きくて、美しいものになり、参加者はこれからもずっと教会に来続けるようになるだろうと。

サンディは、「新しい教会を作るべきよね？」と語りかけつつ、リリーと一緒に歩こうとするけれど、リリーはサンディから離れていってしまう。

見ているグループメンバーはこれにとっても驚く。サンディは明るく、力強いリーダーで、彼女についていけないなんてありえないような雰囲気を出している人なのに。なぜ？

その時、牧場にいた9頭の馬たちが嘶きはじめた。まるでコーラスのよう。餌の時間でもないし、牧場には何の変化もなかったのに、と皆が不思議に思う。

馬たちがサンディのそばに集まり、一列に並ぶ。馬たちの耳はサンディの方に向けてピンと立っている。

サンディは馬たちに向かってたずねる。「私に何を求めているの？」

理由も分からないまま、一日目のワークは終了。次の日も、そしてまたその次の日も、異なるプログラムを行うのだけれど、なぜかサンディがやる時は馬たちがコーラスする。

3日間続くこの不思議な現象を、もはや参加者たち皆が偶然だとは思わなくなっていた。

「あなたの中にある望み、信念を馬たちは聴いている。あなたが自分をどう思うか、どうあるべきか、でなくて、心の声に呼応しているに違いない。もし良かったら私たちにその心の声を教えて」

サンディは大きく呼吸をして答える。「私自身の言葉に耳を傾ける時が来たみたいですね。私は新しいスピリチュアルセンターを開きたい。どんなものになるか、今は分からないけれど、一歩踏み出せばどんなものになるかはっきり分かるようになると思います」

う～～む、馬が賛美歌を歌っている情景。

天使降臨みたいだなあ。

まあ、でもサンディはそもそもスピリチュアルな力が凄い人なんだろうなあ。だから馬も呼応したとか？などと思いつつ、読み進める。

私の中の「真実」とは…

あ、ありました、少しだけ私に近い事例。

ジョージはハンサムな30代の成功者。シリコンバレーに大きな家を持ち、ポルシェに乗り、美しく、しかも、ジョージと同様成功者でもある妻がいる。

ジョージのパートナーの馬はステラ。大人の雌馬。

ジョージはステラに向かって自分の望みを伝える。

「僕はもっとお金を儲けたい！」

そして、その望みを心に強く思いつつ、ステラに歩くように指示を出す。けれど、動かない。

ジョージは、自分の本当の望みは何かを考える。でも思い浮かばない。今までずっとお金儲けのことを考えてきた。ほかの望みのことなんて考えもしなかったのに。フラストレーションが高まる。でも、ステラは地面に根が生えたように、びくともしない。

ステラの様子を見て、ジョージは「あれ、もしかして、お金儲けにはもう興味がないかも」と思い始める。これは人生で初めてのこと。

では、いった何を望んでいるのか？

考えるけれども分からない。結局、ステラは立ち止まったまま。その日、ジョージは諦めて帰ることになった。

それから6カ月後、ジョージから喜びのメールが来る。ITの会社をやめて、都市の中で農園を創るコミュニティのリーダーとなり、若者たちに食べものの育て方を教えている、と。

ふむ。

さて、私の「ゴール直前の挫折」は、私の中のどのような「真実」を照らし出しているのか？

シンプルに考えよう。

馬が私の真実を映し出しているとするならば、馬がゴール直前で立ち止まる＝私がゴール直前で立ち止まる、という事実があるということ。

あの時思い描いたインドネシアでのプロジェクト。

私はあのプロジェクト、ゴールを切る気持ちが、本当はないんじゃないの？

「いや、あるよ。じゃなきゃ、お金も時間も使って、あんなめんどくさいことしないでしょ」と、頭の中の声が即答する。

でも、イギリスで、全く動かなくなった馬たちの感触が身体に蘇る。

はあ…。

あまり言いたくないけれど、あのプロジェクト、小さな商品の一つ作って、小さく販売して、ゴールを切った風に見せかけているけれど、実際にはきちんと販売もできていなくて、「6次産業化」として成功していない。

だいたいあの時、取りあえずインドネシアのプロジェクトを思い浮かべたけれど、実は、絶対達成したいと心に決めている仕事がなく、困惑したよね、私？！

今も、誰かに「どんな仕事をしているのですか？」と聞かれると、いつも戸惑ってしどろもどろ。

それはなぜなのか？

もしかしたら、認めたくないけれど…

突然、稲妻に打たれたような衝撃を覚える。

…もしかしたら！ やっぱり、そうかも…

すごく、かつこ悪いし、一緒に仕事をしてくださった方々の手前もあり、認めたくないけれど。

私の根っこ、奥深いところに現前と横たわる、超モラトリアム気質。あの時、一緒にワークした3頭の馬たちには、あっさり見抜かれていたのだ。

馬、凄すぎる！

しかし、いい年して、いまさらモラトリアム？！

半ば仕方なく、止むに止まれずさらに内省する。

馬と一緒にゴールを切りたい

ゴールを切らない、モラトリアムでいる私の「目的」は何なのか？

(ちなみに、原因ではなく、目的を探る、というところがポイント。これは、牧場暮らしやセラピーの現場で交わされている対話の中で発見し、新たに意識するようになったこと。何か問題があった時に、その原因を探るのではなく、その目的を探るということをするようになった。最近日本でも売れているアドラー理論の一部でもある。)

会社を辞めてからのこの数年、私は、私自身で判断するとか、選択するということを避けてきた。西欧的な考え方からすればとんでもないこと。「奴隷になります！」宣言に聞こえるかもしれない。

退職してすぐの頃の私の脳みそは「グローバル経済社会で生き抜くための価値観」に占拠されていて、それ以外の思考ができなかった。でもその価値観は限界に来ていて崩壊寸前（実は崩壊している）と感じている。だから、“生き延びるために”ほかの生き方、ほかの考え方をしたい。けれど、できない、分からない。成り行きとか、直感に任せて、行動するしかなかった。

グローバル経済社会の価値観からいったん離れたい、というのが目的で、選択をせず、モラトリアムを続けていたのだ。

その結果出会ったカンボジアやインドネシア、タイの田舎での暮らし（仕事）や、日本の過疎化・高齢化が進む小さな地域での暮らし（仕事）、牧場の暮らし（仕事）の中で、自分ができそうなことを見つけ、目の前にある課題をクリアする。その繰り返し。

そうした仕事を、ありがたい、楽しい、大切だと思いながらやってはきたけれど、自分の天職や使命（ミッション）だという感覚はなかった。ゴールを切る、ということなどに思い及んでいなかったのだと思う。

馬たちが、ゴール直前で立ち止まってくれたこと。

そのときの身体的な衝撃。

それがなければ、私の内省はこんなふうに深まることはなかった。

こういうことは、本や、人との交わりからは得難い。そりゃそうです。人間の力の及ばない「馬の力」を借りたのだから。

さて、私がモラトリアムでいる目的は分かった。では、モラトリアムな自分を、これからどうしましょう？

いい年だし、そろそろ「ゴール」というか、「使命（ミッション）」を感じて、暮らしたい、仕事したい。

モラトリアムから脱出して、次のステップに進みたい。

馬と一緒にゴールを切れるようになりたい。

次回はモラトリアム脱出の方法について書きます。これもまた、馬の力を借りることになります。

｜ このコラムについて

馬に教わるリーダーシップ

外資系IT企業日本支社の部長としてマネジメントに奔走していた「私」は、リーマンショックに伴う業績悪化から突然解雇される。新規ビジネスの立ち上げを模索する中、以前から疑問を抱いていた自分自身の統率力やコミュニケーション能力に向き合うきっかけがやってくる。それは偶然からの「馬」との出会いだった。

群れで生きる馬は、そのときどきの生存環境に最もふさわしい資質を持つリーダーに一期一会で従うという。言葉を理解しない馬と意思を疎通するうちに「私」は自分なりのリーダーシップ、そしてコミュニケーションの本質について学んでいく。

人間の振る舞いを鏡のように映し出す馬を通して、卓越したリーダーシップ、優れたチームワークとは何かを探し求めていくオン・ザ・ウェイの物語。



copyright © 2006-2019 Nikkei Business Publications, Inc. All Rights Reserved.

日経BP社